罪惡を容るゝ宗教

梅村舜道

一

佛教には多方面の說き方があつて、極めて罪惡を誡め、身の行ひ、物の言ひやう、心に思ふこと凡て正しく行ひ、正しく言ひ、正しく思ふ、微塵ばかりも質道を離れまじと正見正道を辿ることを教へる方面があつて是が卽ち佛教の正面で、止惡修善が釋迦佛の教誡たると俱に三世の佛の通誡である。

而も此の正見も、正行も正語も、實は佛陀の信仰を離れては殆ど成立しない。たとひ此を學するとも殆ど氣脫けのしたる、個條となつてしまつて、空しく個性を枯涸せしむる束縛とも化して了ふのである。茲に於て少しく此の正見正行に生氣を見出さむとすれば、勢ひ佛陀とは何ぞ、佛心とは何ぞと、其の核心に突き進まねばならぬ。然るに釋迦佛の御在世はいざ知らず。佛陀の滅後に於て、佛陀とは何ぞ、佛心とは何ぞと、或は遺教に討ね、或は自ら工夫鍛錬して、以て正見正道の源底を叩かむとすることは容易

の事で無い。勿論此の道は尊いことには相違なからうが、萬人に望むは甚だ困難である。卽ち是れは稀に聖人賢人に望むべき道である。宗祖が聖道門と仰せられたるは恐らく此の方面の道を指されたものと思はれる。然るに善導和尙や、元祖法然上人は、斯くの如く眞向から正見なれ、正道を辿れとは仰せられなかつた。卽ち罪人愚人が助かる救はれる、直されるのじやと仰せられた。此れが卽ち淨土門であると思はれる。

善導和尙の疏の文に曰はく。『諸佛の大悲は苦者に於てす。心偏に常沒の衆生を愍念し玉ふ。是を以て勸めて淨土に歸せしめたもふ。水に溺るゝ人の如きは、急に須らく偏に救ふべし。岸上の者の如きは、何ぞ濟ふことを用ふることを爲さむ』と仰せられて。他の諸師が淨土の法門に於て救はるゝ人を賢人聖人なりと考へられたるに大に反對せられて、岸人の賢聖は淨土門の急要でない。淨土門に於て救はるゝ人々は悉く凡夫であつて、善人惡人悉く攝めるのであると斷定せられた。又元祖法然上人は選擇集の眞最初に、道綽禪師の安樂を揭げて、『當今は末法。現に是れ五濁惡世なり。唯淨土の一門のみ有りて。通入すべきの道なり』と仰せられて。大乘に言ふ眞如も、實相も、第一義空も、到底今時の吾等には本當の事が解るもので無い。亦小乘に言ふ四諦も、八正道も、いかさま吾等が修行の分でない。のみならず、有漏の世間普通の善事である、五戒も十善

も持つことの出來ぬ吾等である。さすれば人間天上の果報も失つて居るものである。唯此ればかりで無い。若其の惡を起し、罪を造ることを論じたれば、暴風や驟雨も同樣である。此れではとても惡道へ趣くことは免れまい。實に悲むべきことである。(彼のバルチザンの如きを思ひ見、亦世の實際を省みよ)是を以て諸佛の大慈止むに休まれず、勸めて淨土に歸せしめ玉ふのである。縱使ひ一生涯の間、惡を造ることが止められなくとも(平安朝の始め法華を持ち念佛せる淨尊等の如き)但能く意に繫げて、專精に常に能く念佛すれば、一切の諸の障り自然に消除して定むで往生することを得るのである何ぞ能く思ひ量らずして都て去る心が起らぬであるかと歎ぜられて居る。甚だ味ふべく三思猛省すべき御辭である。

二

吾人が元祖法然上人の教義を通じて著しく感ずることは、現在の否定と、現在の肯定である、末代の否定と末代の肯定である、個人の否定と而して亦個人の肯定とである。此の大矛盾が法然上人を通じて融和されて居ることである。亦大無常觀と常住觀との調和とである。此の矛盾が上人を通じて妙に調和されて居ることである。闘諍と平和、此が法然上人を通じて妙に調和されて居ることである。自調と化他、此の矛盾が

上人を通じて妙に調和されて居ることである。此土と他土此が上人を通じて妙に調和されて居ることである。此佛と彼佛、此が上人を通じて妙に調和されて居ることである。苦難と勝樂、此が上人を通じて妙に調和されて居ることである。是を以て上人の教義と御一代の生涯とは大なる矛盾と調和であるとも云へよう。

吾人は亦元來淨土教に於て此の一大矛盾と調和の實在を見るのである。淨土教の根本聖典たる三經の所說は。元來此土の濁惡苦惱を示し、此を厭ひ、此を捨て、彼の安樂淨土の清淨妙嚴なるを願へ欣べと云ふことである。故に畢竟此の娑婆世界のことの如きはどうでもよいのである。然るに雙卷經の下には『佛の遊履したまふところ。國邑丘聚。化を蒙らずと云ふことなし。天下和順し。日月清明なり。風雨時を以てし。災厲起らず。國豐かに民安らかにして。兵才用ふること無く。德を崇め仁を興して。務めて禮讓を修む』とありて殆ど此の世の理想世界の實現が示されてある。勿論是の時の佛とは或は釋迦牟尼佛の遊履し玉ふ所と見るが本當であるかも知れぬが。此の經の所詮が元來彌陀の本弘誓願を顯はすことが本意であるとすれば、佛の遊履と云ふことは、強ち釋尊に限るべきでない。寧ろ念佛者の住する所へ、彌陀如來が遊履し玉ふのであると見る方が今經の本意に適ふものであると見ねばならぬ。亦同下卷に『正心正意にして

齊戒淸淨なること。一日一夜すれば、無量壽國にありて、善を爲すこと百歲するに勝ぐれたり。所以はいかむ。彼の佛の國土は。無爲自然にして。皆衆善を積みて、毛髮の惡無し。此に於て善を修すること十日十夜すれば。他方諸佛の國土に於て。善を爲すこと。千歲するに勝ぐれたり。所以いかむとなれば。他方の佛國は。善を爲すものは多く。惡を爲すものは少し。福德自然にして、造惡なきの所なり』等とある所より見れば、厭離穢土、欣求淨土の淨土敎が。同時に此の世に於て、極力奮勵して。修養積善すべきものであると云ふことを勸めてある敎であると云ふことができるのである。

翻つて宗祖の述作選擇集に覩るに。先づ一代佛敎を聖道淨土の二門に判つ所以を揭げ。其の聖道の一種は、大小乘を通じて凡て此の世に於て佛果に證入せむと敎ゆる法門であると述べ。淨土の一門は此の世に於て佛果に證り入ることを努むる敎ではない。將來の世に於て淨土に詣る敎である。亦聖道の法門は自分の力を非常に高調するのであるが。淨土の法門は他の力を賴むのである。故に聖道の法は隨分困難であるが。淨土の法は比較的心易いのであると斷ぜられた。斯樣な表面の說き方を見ると、兎に角聖道の法門は今の世に於て、佛果に證り入る敎へであるから、積極的で、元氣があつて、而も勇ましく、現實的に効果があつて、人の氣に投じ易いやうにも見られぬこと

は無い。之に反し淨土の敎は消極的であつて、意氣に乏しく、甚だ現實的効果に遠ざかつて居つて、どうも人の氣に入り難いやうにも考へられぬでは無い。

然るに上人の說に據ると。此の表面の見方が全く反對の結果となつて居る。此の見方は、全く時代の觀察と、自個反省から(機)來て居るのであるが。其の實効の現はれる力は全く佛願增上の他力に據ることは言を恃たない。卽ち其の時代の觀察とは、釋尊の御在世及び、正法像法の時代に於ては。どうなりこうなり此の世に於て佛果に證入する道も開けて居るのであるが。末代の世になつて見ると、てんで此の世に於て佛果に證入することは、形にも顯はすことが出來ねば、亦其の妙甘露味を證り得ることも出來ない。たとひ其の敎は世に遺つて居つても、もう時代が此を容れる力を失つて居る。次に自個反省とは、吾人が各自に自分の實際力を反省して見ることである。若し吾人が實際に各自を內省して見ると、どうも眞ともに佛道に進む器でないことが判る。のみならずどうも罪惡の道には甚だ進み易い宿習性を持つて居つて、如何ともすることが出來ぬのが吾等の實際ではないか。玆に末代の肯定と、現生の絕望と、浩歎とが殘るのみである。されば上人は時代を歎じて、登山狀に『それ流浪三界のうち、いづれの界におもむきてか、釋尊の出世にあはざりし、輪廻四生のあひだには、何れの生をうけて

か如來の說を飾かざりし。華嚴開講のむしろにもまじはらず。般若演說の座にもつらならず。鷲峰說法のにはにものぞまず。鶴林涅槃のみぎりにもいたらず。われ舍衞三億の家にややどりけむ。しらず地獄八熱の底にやすみけん。はづべし、はづべし、かなしむべし、かなしむべし』と仰せられたるは、正しく釋尊滅後の浩歎を衷心から披瀝なされたお辭ではないか。されば こそ保元々年上人御年二十四の時、叡空上人にいとまをこひて、嵯峨の釋迦堂に七日參籠の事實となり、亦南都北嶺に當時の碩匠の門を叩かれることゝなつたのである。

其の機の省察には、「現に罪惡生死無有出離之緣の凡夫」と肯定し、「十惡愚痴一毫末斷惑の凡夫」と肯定し、「既に戒定慧三學の器にあらず」と肯定し、曠野の迷子であることを自覺せられたのである。斯くて時代的にも、個人的にも何等積極的光明を見出だすことの出來ぬ絕對消極の上に、始めて佛願增上の大なる他力を認め來る所に淨土敎に依る復活の生命があるのである。されば選擇集の上には上人は、極力佛願大悲の救濟力を高調し、現生的にも、亦永劫的にも、如來の靈道が吾人の前に開かれたることを述べ給ひ、亦此の個人的にも時代的にも廣大なる救濟の力となつて現はれなければならぬのであることを力說せられた。同第十二章段には『故知諸行。非レ機失レ時。念佛往生。

當レ機得レ時。感應豈唐捐哉。當レ知隨他前。雖三暫開二定散門一。隨自之後。還閉二定散門一。一開以後。永不レ閉者。唯是念佛一門。彌陀本願。釋尊附囑。意在レ此矣。行者應レ知』とありて今此の淨土門は、感應唐損ならず。現實的驗證空しからざることを高調し玉ひ。猶後序の結びとして『當レ知淨土之敎。叩二時機一。而當二行運一也。念佛之行。感二水月一。而得二昇降一也』と高調し玉ひ念佛の法門こそ時代相應の敎である。念佛の法門こそ、現證當果虛しからざる敎であると仰せられて、茲に末代の否定となり、個人的愁歎の消滅となり、現生的効果の高調となりて、殆ど表面的聖淨二門の見方を改められてある。

更に宗祖大師の御一生は一層此事を力强く證明されて居る。始め叡岳に上りて眞實の佛道を辿らんとして、此に望みを絕ち、一代の聖敎を見て尙此を得ず、釋尊の靈像に額づきて、末代の浩歎を訴へ、諸宗碩學の門を叩きて求法の誠を現はし、猶一道の光明を見出す能はず、智慧第一の稱譽は却つて上人をして、時代的にも個人的にも、愈々曠野である迷子であることを痛切に自覺せしめられた。此の絕望の裡より上人が彌陀の本願に出逢ひ玉ひし經路を勅傳第六には左の如くに述べてある『或る時上人おほせられていはく。出離の志深かりしあひだ。諸の敎法を信じて。諸の行業を修すおほよそ佛敎おほしと雖へども、所詮戒定慧の三學をばすぎず。所謂小乘の戒定慧。大乘の

戒定慧顯教の戒定慧。密教の戒定慧なり。しかるに我が此の身は戒行に於て。一戒をもたもたず。禪定におきて一もこれを得ず。人師釋して、尸羅清淨ならざれば三昧現前せずと云へり。又凡夫の心は、物にしたがひてうつりやすし。たとへば猿猴の枝につたふが如し。まことに散亂して動じやすく。一心しづまりがたし。無漏の正智。なにゝよりてかおこむらや。若し無漏の智劍無くば。いかでか。惡業煩惱のきづなをたゝむや。惡業煩惱のきづなをたゝずば。なんぞ生死繫縛の身を。解脫することを得むや。かなしきかなしきかな。いかゞせん。いかゞせん。こゝに我學が如きは。すでに戒定慧の三學の器にあらず。此の三等の外に。我が心に相應する法門ありや。我身にたへたる修行やあると、よろづの智者にもとめ。諸の學者にとぶらひしに。をしゆるに人もなし。しめすに輩もなし。然るあひだ。なげき〳〵。經藏に入り。かなしみ。かなしみ、聖教にむかひて。手づからみづから。ひらき見しに。善導和尙の觀經の疏の。一心專念彌陀名號行住座臥不問時節久近念念不捨者是名正定之業順彼佛願故と云ふ文を見得てのち。我等が如くの無智の身は。偏に此の文をあふぎ。もはら此のことばをたのみて。念念不捨の稱名を修して。決定往生の業因に備ふべし。たゞ善導の遺教を信ずるのみにあらず。又あつく彌陀の弘願に順ぜり。順彼佛願故の文。ふかく魂にそみ。心にとゞめたるなり』と。いかにも

巧みに上人の心的經路が述べられてある。淨土の法門に入り、淨土の信念を樹立せむものは、大なり、小なり此の經路を辿らねばなるまい。而しで上人は、彼の佛願に依りて、自ら大悅の人なり玉ひしと俱に、其の感化力は一世を覆ひ、貴賤を該ね、智愚を攝め、善惡等しく彌陀大慈の惠みに潤ふたのである。南都北嶺の迫害にも屈し玉はず、讒誣の流刑にも、めゝしくは歎き玉はず、却つて朝恩なりと謝して、我れ死刑に處せらるゝとも此の事言はずばあるべからずと仰せられて、蓮順の境に對して節を二三にせむとする弟子を誡め玉ひ、自ら所信の前に邁往せられたる大勇に至りては、千歲の下に人を起たしめる慨がある。八十の老齡を以て吉水の草庵に諄々と弟子を誨して、往生の素懷を示し玉へる芳跡は慥かに釋尊の大涅槃を偲ぶことが出來る。時人稱して、勢至菩薩の應現であると言ふ洵に以て所以あるかなである。吾人は茲に於て、佛願大悲の力が能く人を靈化して、現當の靈道に蘇活せしむる靈用のあること信せねばならぬ。宗教の光りは確かに、偉大なる、自他の救濟力として現はれねばならぬ。予は是を宗祖の著作と、御一代の實際と、御在世及び滅後を通じて、窺はしていたゞく。

三

宗教は永遠の力でなくてはならぬ。又永遠の光りでなくてならぬ。況や佛願大悲の

御力が昔に現はれて、今に現はれぬと云ふことはあるまい。萬機普益の誓願が、人には現はれて我身にはあらはれぬと云ことはあるまい。況や末法萬年餘教悉滅、彌陀一教利物偏增なるをや。

宗教が人生の救濟の力として亦光りとして顯はるべきものである以上、吾人は淨土教の幽旨たる彌陀の弘願の力に於て、其の完全なる顯はれであること信受せねばならぬ。彌陀の弘願とは卽ち罪惡を容るゝ宗教でなければならぬ。其の罪惡を容るゝとは、自個若しくは衆生の方より罪惡を容すのではない。自分の方よりは、誠に罪惡の結晶である、どうすることも出來ぬものであるとの堅い信念に立ちたる、あやまり入つたる姿でなければならぬ。自分の方からは一分たりとも、罪惡を容すと云ふやうな横着な精神があつてはならぬ。其の罪惡を容るゝとは、彼の彌陀の廣大なる願力を指すのである。彌陀の廣大なる願力こそ、一切の罪惡を受容れらるゝのである。罪障の結晶たる凡夫が、廣大なる彌陀の大悲誓願を仰ぐとき、彌陀は大悲の御手に依りて、其の一切の罪障の重荷を引取つて下さるのである。併し罪惡は何處までも罪惡であるが彌陀弘願の御手に委ねた上になほ、いつまでも罪惡であつてはならぬ。茲には大なる變化作用が行はれなければならぬ。その變化作用を巧みに行ひ玉ふが彌陀の大悲の

本願力であり、おゝ廣大にして限り無き彌陀誓願の大悲の御力よ！御身の無上本願力は十劫の昔より、成就し玉ふて、普く十方界の罪惡を變化しつゝ、眞如界に同ぜしめつゝあらせらるゝを。吾等は尙無力の自個の上に無限の罪惡を背負ふて、永劫の旅路に泣かねばならぬのか。哲學や宗敎が宇宙法界を對象として居る以上、吾人の理想界の成就たる極樂國土が、十萬億土を超過して居ようとも、直ちに架空として背きはてる程、近視眼であつてはならぬ。況や其の敎主彌陀世尊は、無礎の御力を成就ましまして此の土を眼前に攝め玉ふをや。そも〳〵佛力は無力にして、能く宇宙法界に及ばざるへからざるものなるに於ておや。遠い力が密接に働くと云ふことは、吾人が日々實驗し得るこゝである。衣食の如きは、吾人が生存の上に於て、最も密接なる資力であるされど遠き太陽の力がどの位吾人の生存の上に偉大にして離るべからざる力であるかを考へねばならぬ。衣食の資力の如きも實は太陽の大なる力が充分に加はゝつて居ることを思はねばならぬ。遠き力豈近く顯はれざらむや。況や吾等が心靈界の救主彌陀世尊が、如何に遠きに在せばとて、其の御力が近くあらはれ玉はざらむや。彌陀の御力が近く顯はれ玉へばこそ、吾人が其の本願力を信じたてまつる立所に、不可思議の變化作用をおこさして頂くのである。此の不可思議の變化作用こそ洵に廣大難

思に在す。選擇集第十一章段に曰はく『下品下生。是五逆重罪之人也。而能除滅逆罪。餘行所不堪。唯有念佛之力。堪能滅於重罪。故爲極惡最下之人。而說極善最之上法。例如彼無明淵源之病。非中道府藏之藥。卽不能治。今此五逆。重病淵源。亦此念佛。靈藥府藏。非此藥者。何治此病』と宣ふ。卽ち罪惡を病に譬へ、念佛の力を藥に喩へ、念佛のみ極重の逆罪をも能く治することをのべたまふ。是れ卽ち佛願力の偉大なる包容力と變化作用に在さずや。斯くて上人は、弘法大師の二敎論を引き玉ひて『此の中五無間罪者。是五逆罪也。卽非醍醐妙藥者。五無間病。甚爲難療。念佛亦然。往生敎中。念佛三昧。是如總持。亦如醍醐。若非念佛三昧。醍醐之藥者。五逆深重病。甚爲難治。應知。問曰。若爾者。下品上生。是十惡輕罪之人。何故說念佛乎。答曰。念佛三昧。重罪尙滅。何況輕罪哉。餘行不然。或有減輕、而不減重。或有消一。而不消二。念佛不然。輕重兼滅。一切徧治。譬如阿伽陀藥。徧治一切病。故以念佛。爲三昧』と予は益々佛願力の洪大なる罪障の包容力と其の變化作用に肯かざるを得ないのであります。重ねて申すが、其の罪惡を容れると云ふことは、決して凡夫自身が自ら許すのではない。佛願大悲の燃燒力が能く一切煩惱罪惡の薪を燒き盡す方を申すのであります。彼の法照禪師の五會法事讚に慈愍和尙の般舟三昧讚として引かれたる『彼佛因中立弘誓。聞名念我惣迎來。不簡貪窮將富貴

不簡下智與高才。不簡多聞持淨戒。不簡破戒罪根深。但使廻心多念佛。能令瓦礫變成金』ト云ふ文は能く這裡の消息を說破されたものと思ひす(選擇集第三章段卽ち一切善惡の人、喩へば何の用にも立たざる、瓦礫の如き凡夫が、彌陀佛の念力に依りて、能く無上の妙寶たる黃金と變化すると申された。瓦礫が黃金と變化することは如何にも譬喩的に見ゆるのであるが。實際萬物を科學的に見ると、皆悉く因緣生のものであつて同時に自らの自性はない。其の元素に還してしまへば、悉く同體である。廢物利用と云ふ語もあつて、一切萬物も利導の法を能く究むれば、悉く黃金の如き尊いものと變化することは事實である。時來れば、地の中の小蟲も、綠樹の影に妙音を奏する蟬と變じ糞中の蛆蟲も變じて花間に蜜を尋ねる蝶と變じ、木を割りて見て、花の香も無き櫻桃梅梨の、一陽來復の春光に遇ひつれば、芳香の妙葩を飾るのである。皆是れ天地自然界の不可思議の現象である。超世の悲願を成就したまへる、法界の靈王豈不可思議力ましまさざらむや。斯く罪惡を容るゝ、淨土の法門は、自個にとりては、至心懺悔の宗敎でなければならぬ。如來に對しては、とめどなき感謝報恩の宗敎でなければならぬ。國家社會人類に對しては、奉仕回向の宗敎でなければならぬ。思ひ遣りの宗敎である。一切の世人と俱に願主彌陀の御前に泣く宗敎である。容されたる歡びと、護られたる御力と

に依りて源を以て辿らねばならぬ宗教である。

洛東善氣山下、臘月上九日、末代沙門舜道謹むで有信の人に白す。

讃頌哲學

——（ウイリアム氏印度教第二章）——

前田聽瑞

吠陀の意義　吠陀（Veda）——知識を意味する——といふ言葉は不文の聖智（divine unwritten knowledge）に適用された文字である。而して吠陀は梵（Brahman）といふ自存の實體から氣息の如く吐き出されたものだと想像せられ、又それ自身自存であるとも考へられてゐる。だから、吠陀はそれ自身度々梵と呼ばれる。そうして、その梵なる言葉は「宇宙遍在の本體」か、さもなくば「人心に透徹せる信仰の精神」とか「靈的聖者」とかを意味するものなのであらう。

（私註）支那ではベダを毗陀、皮陀、韋陀、圍陀、韡陀、辟陀、吠陀或は波陀などゝ音譯し、智論又は明論とも翻してゐる。

口誦傳持の吠陀　この聖者は又シャブタ（Śabda）即ち聲——永久的なものだと